

第2章 銃後

子どもたちの生活③【北海道・十勝】

白いご飯が食べたい

茂木慶一さんのお話から

○国民学校 昭和十六年（一九四一年）の国民学校令というきまりにより、これまでの小学校を改めて成立した、皇国民の育成をねらいとする教育機関。

私は、十勝の帯広市の近くで育ちました。国民学校に入学したのは昭和十七年（一九四二年）、昭和二十年八月十五日、十歳で終戦を迎えました。

私の家は十勝の農家でした。当時、食べ物少なかつた中においても、農家は食べるものに困るということはありませんでした。家は畑作農家であり、水田で米を作っているわけではなかつたので、お米はありませんでした。しかし、カボチャやジャガイモあるいは麦など作っておりましたので、それらをお米の代わりに食べていました。毎日食べていましたので、子どもたちには「白いご飯が食べたいなあ。」と思っていました。

都会に住んでいた人たちと農家では、大きな違いがあつたと思います。都会では作物を作っていないわけですから、本当に食べる物がなかつたようです。私たちの家族は農家でしたから、食べる物は自分たちで作つたものを食べればよかつたのです。それでも、麦や稲きびを混ぜて炊いたご飯や、まだ量が足りないもので、そこに豆を入れて増やしました。麦や豆ばかりで、ご飯などは、ほんのちよつとしか入っていませんでした。

そのころの学校には給食がなかつたので、みんな学校にお弁当を持っていきました。お昼になつて、自分のお弁当の中身を見られるのがいやで、お弁当のふたを開けるのが恥ずかしかつた思い出があります。満身に米を食べられない時期がしばらく続きました。本当に米の飯がうらやましい、そんな子ども時代でした。

着ているものは、私たちが子どもころは着物ではなくて、普通の洋服でした。ただ、破

- 空襲警報 戦争中に敵の飛行機が来て爆弾を落としていくときに、被害が出ないようにするため、発令する警報。
- 風呂敷 物を包むのに用いる正方形の布。
- 防空頭巾 空襲などのときに飛んでくる物や落ちてくる物から頭部を保護するために頭にかぶった綿入れの頭巾。

れたらすぐに新しいものがもらえるような時代ではなかったもので、破れたところに別の布を当
てているというような洋服でした。学校に行くときも、そういうものを着て行っていました。
今の人たちと着ている服の形は変わらなかったと思いますが、布も、ボタンも、そんなにいい
ものではなかったと思います。

帯広の近くの農家で育ったおかげで、
都会のように大きな空襲にあうことは
ありませんでしたが、やはり空襲警報
が出されるといふようなことはありません
た。親からは、ランプの明かりが外にも
れると敵の飛行機に見つかってしまうか
らと、風呂敷をかぶせるように言われた
ものです。当時は、今のように電灯では
なく、ランプを部屋の明かりに使ってい
ました。空襲警報が鳴ると、風呂敷を
ランプにかぶせ、綿の入った防空頭巾を
かぶり、いつでも家から逃げ出せるよう
に準備をして待っていました。いざと
いうときには、敵の爆弾が落ちてきても
大丈夫なように地面に穴を掘った防空
壕に入るよう言われていたので、その用



イメージ図

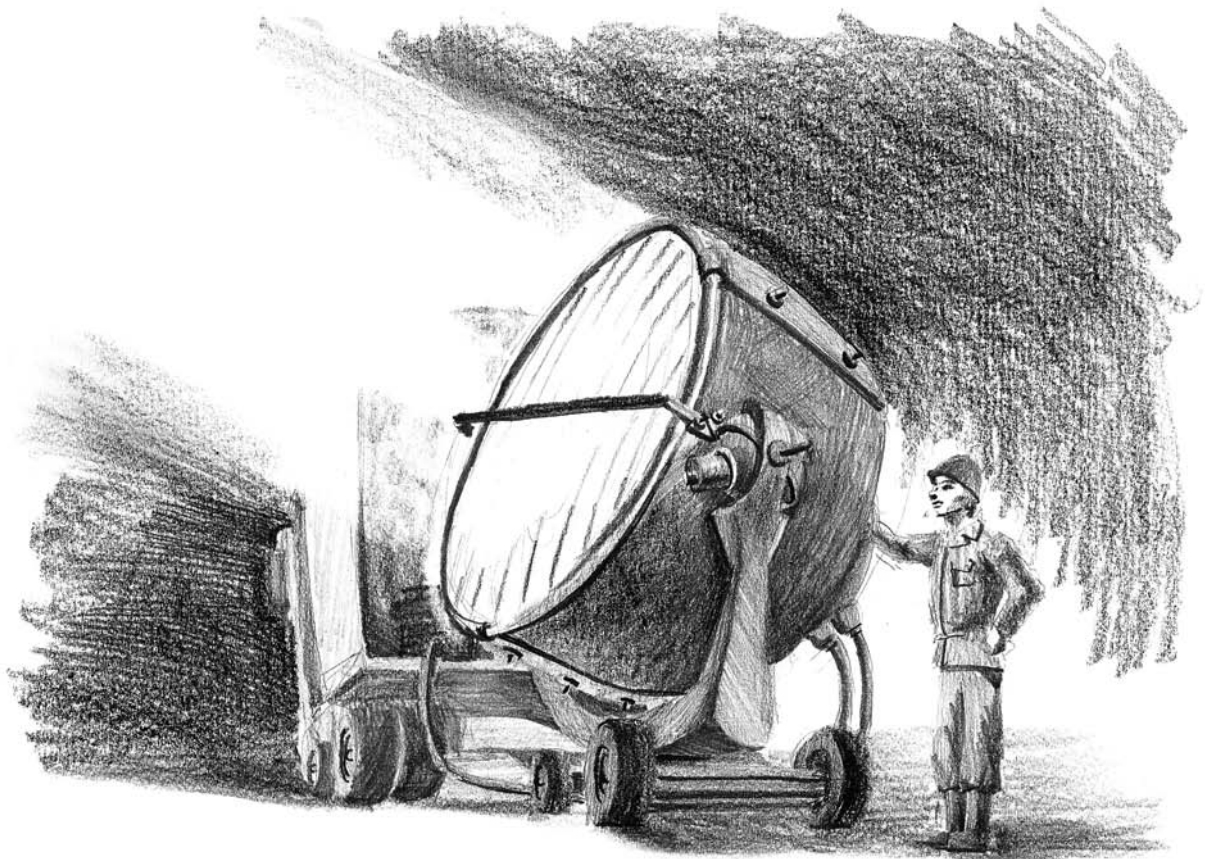
戦時中の子どもたち

白いご飯が食べたい

意をしていたのです。

私の家は帯広市に近かったの
で、外から飛行場の方を見ました。
飛行場は、空襲でねらわれるこ
とが多く、敵の飛行機を見つけれ
ないための大きなライト、サーチラ
イトが空を照らしていました。その
サーチライトが、ものすごく光り
ながら動いているのが見えるので
す。その光景を見るたび、「敵の
飛行機が飛んでくるのではない
か。」「爆弾が落ちてくるのではな
いか。」と本当に恐ろしい思いを
しました。

また、空襲にまつわる話では、
子どもころにこんなことも聞い
たことがあります。もしかした
ら、銃を持った敵の兵隊が、飛
行機からパラシュートで降りてく
るかもしれない。そのときは戦争



イメージ図

サーチライト

○つきさつぷ郷土資料館
 もともと旧陸軍北部軍司令部官邸として昭和十六年に建てられたもので、赤いレンガの建物が特徴。戦後は北海道大学の学生寮として使用されていたが、昭和六十年につきさつぷ郷土資料館として開館。ここには、旧歩兵第25連隊をはじめ旧陸軍資料が数多く展示されている。

に行っていない大人の男が、竹やりで突いて殺すのだということです。そのために、竹やりの使い方を練習していたとも聞きました。今思えば、銃を持った相手を竹やりでなんとかできるとは思えないのですが、当時の大人たちはそんなことを本気で考えていたのだと思います。戦争というのは、本当に恐ろしいものです。怖いものだ、あってはいけないものだ、みなさんも感じているのではないのでしょうか。二度と、戦争は起こしてはいけないものです。これからは、みなさんが時代の主人公になります。どうしたら戦争がなくなるのか、どうしたら平和になるのだろう、平和な世界をつくるにはどうすればいいのだろう、みなさんの胸の中で考え続けてほしいと思います。

そのためには、戦争について知ることも大切です。札幌市には戦争についての資料を展示している資料館がいくつかあります。「つきさつぷ郷土資料館」にも、戦争に関係した書物がいろいろとありますので、ぜひ足を運び、そういった資料や本を読んで、戦争の怖さ、平和の大切さをみなさん一人ひとりが考えてください。

ところで、平和とはなんでしょうか。私は、今の日本も平和な国ではないのだと思っています。戦争がないから平和だ、というわけではないと思うのです。人が人を傷つけたというニュースを毎日見ます。そんな国が平和だと言うことができるのでしょうか。みなさんの時代が、本当に平和であるように、それぞれが力を出してよい日本を作ってもらいたいと願います。

DATA

平成20年度豊平区平和事業
 聴き取り

- ・平成20年8月23日
- ・つきさつぷ郷土資料館



茂木慶一(もぎ・けいいち)さん

- ・昭和10年(1935年)生まれ
- ・札幌市豊平区在住